

主 題：ワウ：神のことばと信仰者の決意  
 聖書箇所：詩篇 119篇41-48節

今、私たちは賛美しました。「地につく宝を捨つるは易し、…」、なぜなら、私たちが「いのちの小道を」歩んでいるからです。もしかすると、私たちは「歌うは易し…」かもしれません。私たちのうちのどれだけの人が「地につく宝を捨てるのは安易なこと」と本当にそう思って、そのように生きているのでしょうか？1521年4月18日、ある一人の人物が、ボルムスという町で行なわれた議会へと引き出されました。ときの皇帝であったチャールズ5世、そして、彼の周りにいたローマカトリック教会の評議委員たち、そして、ローマ法王に逆らおうとする一人の修道僧を是非見てみたいものだと思われて来た人たちの前に、マルチン・ルターは立ったのです。彼の立たされた部屋の前には一つのテーブルが置かれ、その上には彼が書いた本が並べられていました。彼には一つの質問が、いや正確には二つの質問がなされました。「これはあなたが書いた本ですか？」というのが最初の質問であり、もう一つは「あなたはその内容を撤回しますか？」でした。なぜ、彼が「その答えをするのは明日にしてください。」と言ったのか、その理由をはっきりと分かりませんが、ひょっとすると、皇帝をはじめ、多くの非常に力強い権威と権力をもった評議委員、修道僧、祭司たちの前に立つことを恐れたのかもしれないし、また、自分自身の運命に恐れを感じたのかもしれませんが。ちょうど百年程前、ルターと同じ内容のことを語り、同じように議会に召喚されて、同じように「あなたはその宣言を撤回しますか？」と聞かれた人物は、議会によって死刑に処されました。ひょっとすると、単に自分が書いた事柄をもう一度吟味し、その内容が本当に正しいのかどうかを考え、祈る時間が必要だったのかもしれませんが。たとえ、それが何であつたとしても、ルターは一晩、きっと祈りの中で時間を過ごしたのでしょうか。そして、次の朝、彼はもう一度ボルムスの議会の前に立つ訳です。彼が解答する時間がやって来ました。彼はこう言いました。「私自身が、みことばと明確な理由によって納得させられない限り、私はローマ法王の権威も評議委員会の権威も受け入れることは出来ません。なぜなら、彼らは往々にして矛盾することを言って来たからです。私の良心はみことばに捕らえられています。私は何一つとして撤回することは出来ないし、撤回したいとも思いません。なぜなら、自分自身の良心に逆らった選択をすることは、良いことでも正しいことでもないからです。私は今、ここに立ちます。みことばに立っています。それ以外のことは出来ません、神よ。私を助けてください。アーメン」と。

いったい、どうすれば私たちはそのように神のみことばに揺らぐことなく立ち続けることが出来るのでしょうか？どうすれば、そのような危険が目の前に迫っている中で、私たちは主に対する決意を揺らがせることなく、主の前に正しい選択をすることが出来るのでしょうか？いったい、どのようにして、ルターのように私たちが自分たちの信仰を試されるときに、信仰生活の中にあつて様々なチャレンジを受けるときに、ルターと同じように語ることが出来るのでしょうか？そのことが、まさに、今朝皆さんといっしょに見て行こうとする詩篇119篇でこの詩篇の著者が私たちに語っていることです。

119篇の第6区分に当たる「ワウ」という詩分節には、私たちに対してこの著者自身が抱えていた非常に危険な状況の中で、彼がどのように神の前に自らの心をさらけ出し、主に祈り、彼の決意を表明したのかが記されています。今朝、私たちが学びたいことは、この第6詩分節の中で、著者が祈った祈りと、彼が語った、宣言した決意を私たちがしっかりと理解することによって、私たちはこの著者と同じ確信、同じ決意をもつようになることです。なぜなら、真の信仰者にはこの決意をもつことが必要だからです。いや、正確に言うなら、真の信仰者ならこの決意を必ずもっているからです。それは弱いものかもしれませんが。弱いものならそれを強くするために、強いものであるなら、このことばによって私たちが励まされるために、また、もし皆さんが「私は信仰者である」と言いながらこの決意をもっていないなら、皆さん自身がしっかりと自らの心を吟味するためです。話したいことはたくさんあります。41-48節まで、みことばを読みましょう。

- :41 主よ。あなたの恵みと、あなたの救いとが、みことばのとおり、私にもたらされますように。
- :42 こうして、私をそしめる者に対して、私に答えさせてください。私はあなたのことばに信頼していますから。
- :43 私の口から、真理のみことばを取り去ってしまわないでください。私は、あなたのさばきを待ち望んでいますから。
- :44 こうして私は、あなたのみおしえをいつも、とこしえまでも、守りましょう。
- :45 そうして私は広やかに歩いて行くでしょう。それは私が、あなたの戒めを求めているからです。
- :46 私はまた、あなたのさとしを王たちの前で述べ、しかも私は恥を見ることはないでしょう。

:47 私は、あなたの仰せを喜びとします。それは私の愛するものです。

:48 私は私の愛するあなたの仰せに手を差し伸べ、あなたのおきてに思いを潜めましょう。

今日はこの箇所を大きく二つに分けて見て行きます。41-43節では、どのようにすれば、著者の決意を全うして生きることができるのか、そのことがここで祈られています。そして、44-48節では、彼の生涯における決意の宣言を見ます。「祈り」と「宣言」、そのように区分することにして、この箇所を見て行きます。非常に大切な祈りが為され、大切な決意が告白されます。皆さん自身がそれをもっているかどうかを考えてください。もっているならそれを強めてください。それによって励まされてください。だから、私もこのように生きて行けるのだと。

## ☆信仰者の決意

### 1. 決意の祈り 41-43節

最初に、祈りについて見て行きます。

#### 1) 決意の源 41節

私たちはこの祈りの中で、いったい、どのように彼が自分自身のもっている決意を全うして生きていくことができるのか、その源、根源を彼が祈っていることを知ることが出来ます。このように生きていくことができるための源、それを祈っています。それが41節に記されています。この区分の最初に出て来ることばは「祈りのことば」です。「主よ。あなたの恵みと、あなたの救いとが、みことばのとおり、私にもたらされますように。」と、非常に個人的で正直な祈りが為されています。

もうすでに私たちは、この詩篇全体の文脈から、著者が非常に困難な状況に置かれていたことを見て取りました。彼の前にはたくさんの敵がいて、彼らはこの詩篇の著者を捕らえようと企て、彼を迫害し、彼に対して酷いことばを語り、また、彼を滅ぼそうと努めていました。そのような中で、彼はひどい落ち込み、落胆を体験し、神に「何とかして私を助けてください」と、そのように祈った姿を私たちはもうすでに見て来ました。彼が置かれていた状況は決して楽な状況ではありませんでした。そして、ここでまた、著者は神の御前に出て、自分自身のその状況の中で助けを求めて行くのです。

この41節で、著者は主語を二つ使っています。「もたらされますように。」「来てください」と言っているのですが、何にきて欲しいのでしょうか？「あなたの恵みと、あなたの救いとが、」と、そのように願っています。「あなたの恵みと、あなたの救いとが、来るように。」と願っているのです。この二つの概念、「恵み」と「救い」は重なる部分が多いのですが、強調しようとしていることの違いを私たちは見なければいけません。

#### (1) 恵み

これは、旧約聖書の中で最も重要な単語と言っても過言ではないことばです。ヘブライ語で「ヘセドウ」といいます。このことばは神学辞書や辞典を引くなら、往々にして「忠誠の愛」、「契約の愛」と訳されています。そのように定義されています。神が契約を結ぶに当たって、その契約を破ることがないという誓いを表わすそのような愛と言われることもあります。このことばのその定義についてもっと時間を使って皆さんと話をすることが出来ればと思うのですが、この箇所において重要なことは、必ずしも、このことばの定義ではありません。重要なことはこのことばの「形」です。実は、ここで「恵み」と書かれていることばは、日本語では全く理解不能なのですが「複数形」です。旧約聖書の中にはこの「ヘセドウ」ということばは245回登場しますが、その中で複数形はわずか18回です。そのうちの一つがここです。

なぜ、複数形なのでしょう？そこが問題な訳ですが、このように複数形を使うことによって、著者は神の溢れんばかりの数多くの恵みについて言及しているのです。また同時に、彼は溢れんばかりの恵みを彼自身が経験していることも示唆しています。つまり、恵みはただ1回だけ与えられてそれで終わりではないのです。神の恵みはたくさんあるのです。溢れんばかりに恵みに満ちた方が、その溢れんばかりの恵みを私に与えてくださいと言うのです。なぜですか？彼の抱えていた問題は、彼にとって非常に大きな問題だったからです。もし、恵みが一つしかなかったら、1回来たらもう終わりです。でも、問題は一つだけではなかったのです。抱えている問題は余りにも多くあったのです。彼は「あなたの溢れんばかりの恵みを注いでください。」と言います。次の箇所にもこのことばが複数形で使われています。

創世記32:10「私はあなたがしもべに賜わったすべての恵みとまことを受けるに足りない者です。私は自分の杖一本だけを持って、このヨルダンを渡りましたが、今は、二つの宿営を持つようになったのです。」

イザヤ書63:7「私は、主の恵みと、主の奇しいみわざをほめ歌おう。主が私たちに報いてくださったすべての事について、そのあわれみと、豊かな恵みによって報いてくださったイスラエルの家への豊かないつくしみについて。」

哀歌3:22「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。」

溢れんばかりの、数多くある恵みのゆえに私たちは滅びうせなかつたと言います。このことばを複数形で使うことによって、この著者は主に対して、溢れんばかりの主の恵みを、最も困難な状況の中において注いでくださるようにと求めているのです。

パウロもこのことを教えています。Ⅱコリント 9 : 8 でこのように言います。「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」、何のためにですか？「あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、」です。この後、著者はこのことを説明して行きます。彼が祈ったことはまさにこのことだったのです。彼は常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者になりたくて、「主よ、どうぞ、あなたの溢れんばかりの恵みの数々を私に与えてください。」と祈るのです。

## (2) 救い

もっと具体的に彼は何を祈ったのでしょうか？「私を救ってください。あなたの救いが来るように。」という祈りでした。ここで祈っているのは間違いなく「霊的な救い」のことではありません。別の言い方をするなら、著者は罪人の悔い改めの祈りをしているのではないのです。「救ってください」と、霊的な救いのことを言っているではありません。なぜなら、この著者が神の前に救われていることはもうすでに明らかだからです。

では、何からの救いなのでしょう？具体的に彼が体験している、今まさに起こっている困難、問題からの解放です。その問題の解決です。「助けてください。救ってください。」と。この「恵み」と「救い」の関係が大切です。ある先生はメッセージの中でこのように言いました。「それは原因と結果である。恵みが原因で救いが結果である。」と。必ずしも、ここからそのように言っていると読み取ることはいかなる場合でも、言わんとしていることはよく分かります。神の恵みが私たちに注がれるときに神は私たちに助けを与えてくださいます。二つの関係を否定することはできないでしょう。神の恵みが溢れんばかりにあるときに、そこには常に助けが備えられています。神の恵みは、私たちが困難な状況に置かれているときに、私たちが救い出される力の源なのです。

パウロはこのように言いました。彼が個人的な困難を抱えていたときに、彼は三度主に祈りました。Ⅱコリント 12 : 9 「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。」、皆さんが抱えている問題がどのようなものであったとしても、詩篇の著者が抱えていた問題が何であったとしても、神の恵みが溢れんばかりにもたらされるときに、私たちには常に助けがあるのです。その確信も実はこの詩篇の中に記されています。「みことばのとおり、」と書かれています。

皆さん覚えていますか？この詩篇 119 篇を見始めた時に、この中には聖書を表わすことば、神のみことばを表わすことばが幾つか使われていると言いました。「律法、仰せ、証」などでしたが、その中で「みことば」ということばがあるのです。日本語では「みことば」と一通りにしか訳されていませんが、実は、原文では二つの違うことばが使われているのです。一つは、一般的な表現で使われる「みことば」、まさに、聖書全体を指すものです。もう一つは、特に「約束」と訳すことが出来ることばです。実は、この二つのことばは両方とも 41 節から 48 節の中で使われているのですが、この 41 節に「みことば」と訳されていることばは、「約束」と訳すことが出来ることばが使われているのです。つまり、著者は確信をもって祈っているのです。「私は問題を抱えています。あなたはその問題をよくご存じであるし、私がこの問題の中でどのような苦しみを抱えているのかも知っています。今まで私はこの祈りをして来ましたが、今、改めてあなたに祈ります。どうぞ、あなたの恵みを与えてください。どうぞ、あなたの助けを、救いを与えてください。なぜなら、あなたは約束しているではないですか。」と、彼には確信があったのです。神は約束の通りにそれを為してくださるから、彼は約束に訴えるのです。神はそれを破られない方であると知っているからです。

皆さんの中で多くの方が、Ⅰコリント 10 : 13 のみことばを暗唱しておられるでしょう。「あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」、詩篇の著者はこのことをよく知っていたのです。神は必ず、助けを備えてくださる、なぜなら、神は真実な方だから、このような約束をされている方だからと言います。彼はよく分かっていたのです。彼の愛する主は彼を見捨てることも彼から離れることもないと。神の属性が、神の特徴が、そのことを彼に確信させたのです。そして、同じ確信を私たちも持つべきなのです。

皆さんがどのような問題を抱えておられるのか知りません。また、今は抱えていないと思っている方

もおられるだろうと思います。でも、私たちが信仰者としての生涯を全うしていこうとするならば、そこには必ず迫害があります。そこには必ず問題があります。楽な人生を生きようと思っておられるなら、クリスチャンであることは止めた方が良くと思います。なぜなら、キリスト者の人生は安易な人生ではないからです。間違いなく、安らぎはあります。慰めもあります。でも、困難から解放されたいと願っておられるなら、皆さんの歩もうとしている道は間違っているかもしれません。クリスチャンの生涯は困難な生涯だからです。狭い道なのです。ときに、死の陰の谷を通る道です。神の前に敬虔であろうとするなら迫害を受ける道なのです。でも、その時に、神は助けを与えてくださることを私たちは知っています。

## 2) 著者の決意 42節

最初の祈りが終わった後に、私たちは著者の最初の決意を見ます。実は、この詩篇の中には「八つの決意」が記されています。44節からの部分で、残りの七つを一気に見ますが、最初の決意がここに記されています。42節「こうして、私をそしる者に対して、私に答えさせてください。私はあなたのことばに信頼していますから。」。

### (1) 祈りに伴う決意：

「私は答えます」と言います。皆さん、私たちが問題から解放してください、助けてくださいと願うときに、私たちが期待していることは、私たちから問題が取り去られることではありませんか？もうその問題を気にしなくてもいい、関係がなくなる、取り去られる、でも、なかなかそのようなことは起こりません。神に信頼して「恵みを与えてください。助けてください。あなたは約束しているではないですか？」と熱心に祈っても、私たちの敵が私たちの前から一向に離れないことがあります。ひょっとすると、皆さんのお隣に住んでおられる方が皆さんの信仰の敵かもしれません。「いくら祈っても隣の人は引っ越ししないな…。もうかれこれ10年も祈っているのに、いつまでも隣に住み続けている。」と知っているかもしれません。私たちはよく覚えていないといけません。もし私たちが「神はどうして問題の解決として、問題を取り除いてくださらないのですか？」と知っているなら、私たちの考え方を改めなければいけません。

著者は「私が答えることができるようにしてください。」と言います。42節「私をそしる者に対して、私に答えさせてください。」と、これはお願いのように聞こえますが、実際に、原文を直訳すると「私はそしる者に対してことばで答えます。」と言います。そのように宣言しているのです。これは非常に興味深いことばです。著者は問題がなくなることを願ったのではなく、問題の中であって、私を攻撃する者に対して、それがだれであろうと「私は答えます」と言うのです。

確かに、問題が取り去られることを願うことは間違っていないです。誤解しないでください。神はときに、それを為してくださることがあります。けれども、ここで著者が決意したことは、問題が取り去られることを考えたのではなく、問題の中に置かれていながらも何をやるのかということです。それが神の恵みが与えられたときに彼がしたいと願っていたことです。それが神の助けが与えられたときに、しようとしていたことなのです。もう一度、この著者が置かれた環境、状況を考えてください。彼の周りにはたくさんの敵がいました。彼の人生は、彼が神の前に忠実に生きようとしていたゆえに、様々な問題を体験していた人生でした。彼の周りには彼を辱め、彼を嘲笑い、彼を中傷し、究極的には彼を殺そうと計画する者たちで溢れていました。なぜなら、彼が主に忠実に生きて行こうとしていたからです。

ちょうど、ダニエルがペルシャのメディアの帝国の中であって同僚たちから憎まれていたのと同じように、ちょうど、イエスが当時のユダヤ人のリーダーたちから憎まれていたのと同じように、パウロが福音の敵たちから憎まれていたのと同じように、この詩篇の著者は神に対する愛と神のみことばに対する愛のゆえに困難を抱えていたのです。確かに、神はときに、人々を問題から完全に解放します。そのように働かれることがあります。けれども、同時に、私たちが覚えておかなければいけないことは、神が問題を解決なさるときは、その問題がなくなることに限定されないということです。神の解決は、私たちがその問題の中であって忍耐し、耐え忍び、勇気をもって立ち向かっていくことでもあるのです。この著者が願っていたこと、また、予期していたことは、彼に反対する者がだれもない、彼を傷付けようとする者がいない楽な生涯ではありませんでした。むしろ、彼はそのように迫害する者、彼に困難をもたらす者たちに出会うその時々、神の真理をもって答えることができることを願っていたのです。そうすることによって、彼が愛する主を人々に宣べ伝えることができるからです。

彼は安易な生涯を願ったのではないのです。神の良さと神の偉大さを宣べ伝えたいと願ったのです。彼は敵によって彼の口が封じられることを願わなかったのです。先ほど言った通り、直訳すると「私にことばをもって答えさせてください。」と訳すことができるのですが、その「ことば」とは明らかに、彼が信頼を置いていた神のみことばです。みことばの真理です。みことばの真理に則した正しい答えを

人々の前で、敵の前で為すことができるようにと決意していたのです。神の恵みが与えられるから、神の助けがあるからです。問題の中にあつて、そこから解放されたいけれど、解放されなくても、私はこのことを熱心にやっていると誓うのです。

それはまるでルターのような者でした。敵を前にして、自分を滅ぼそうとする者の前にあつて、彼が答えたのは神の真理に沿ったことばでした。「私はみことば以外に立つところはない。私はそれ以外のことはできない。」と。神がその約束の通りに助けを与えてくださることを知っていたゆえに、彼はこのような決意を表わすのです。

### 3) 祈りを実践できるように 43節

43節にはまた祈りが出て来ます。祈り、決意、そして、祈りです。最初の祈りは、彼がその決意を生きて行くための根源を求めました。神の恵みが必要でした。ここでは、彼がその決意を全うしていくことができるその力、能力を与えてくださいと祈ります。彼はこのように言います。43節「私の口から、真理のみことばを取り去ってしまわないでください。私は、あなたのさばきを待ち望んでいますから。」。簡単にまとめるなら、「神さま、どうぞ私があることばを語れなくならないように、常にそれを語るができるようにしてください。」です。ある注解者はこのように言います。「真理を証することができなくなるような状況に私を置かないでくださいと祈っている。」と。この著者が最も恐れていたこと、最悪の事柄とは、彼が神とその真理を証することができなくなることです。

皆さん、私たちが真理を証しなくなる状況を容易に想像できませんか？私たちは人を恐れて神の真理を証しないことがよくあります。こんなことを言ったら人はどう思うだろう？と…。神の真理は明らかで、そのことが胸の中でチクチクと自分自身を責めているのに、そのことをしっかりと語るのではなく「ああ、こんなことを言ったらきっと嫌われるだろう…」と神のみことばを口にしないこと、そのようなことはありませんか？周りの人のことが気になって、世間体があるから、どう思われるだろうか？と。ひょっとしたら、私たちがルターのような経験をすることがあるなら、いのちを恐れるかもしれません。迫害の中にあつて神の真理に則したことを言うなら、どのような目に会うか分からない。そんな恐れもあります。また、ひょっとすると、私たちは単に無知で何も語るができないのかもしれないし、ひょっとしたら、私たちがみことばに妥協しているのかもしれません。そのような多くの事柄が私たちが神の真理を語れなくする原因となっています。だから、その弱さをよく分かっているこの詩篇の著者は言うのです。「私の口から、真理のみことばを取り去ってしまわないでください。」と。

彼はその理由をこのように言います。「私は、あなたのさばきを待ち望んでいますから。」と。この「さばき」とは、神が人々に行なうさばきのことでしょう。彼は、それが間違いなく起こるものとして待ち望んでいます。単なる希望的観測ではありません。神がそのことを行なうことを知っているから、私は確かにそこに確信をもって、それを待っていると言うのです。いろいろな問題があるときに、私たちは自分たちで問題の解決を為そうとしますが、彼が気にかけていることは「この問題をどのように解決しようかではなくて、あなたのみことばに沿った正しいことを人々に告げること」です。「さばきは、公平な神が、すべてのご存じの神がしっかりと為してくさるから、そのことは神の御手にゆだねよう。私は問題の中にあつて、私に逆らう人たちに、私をけなす人たちに、私を迫害をする人たちに対して、私がどのような解決をもたらすかではなくて、神のみことばに沿った真理を彼らに正しく伝えることだ」と言うのです。彼にとって最も重要だったことは彼の世間体ではありませんでした。彼が置かれている状況が良くなることでもなかったのです。神のみことばを宣べ伝えることでした。

ペテロはこのように言いました。Iペテロ3：15「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしないなさい。」と。詩篇の著者はそのことを願っていたのです。私たちは何度も繰り返して、自分たちの知恵に頼って問題を解決しようとしています。特に、人間関係において問題が生じるときに、私たちはできるだけそれを滑らかにしようとして、本来なら、問題にしなければいけないことを問題とせず、私たちはいろいろな所で妥協をしながら生活しようとしています。でも、それは信仰者が送るべき人生ではありません。詩篇の著者は、神が約束に基づいて恵みをお与えになることによって、問題から、その危険から解放されることを願っていましたが、それは決して自分自身もっている神に対する、また、神のみことばに対する献身を犠牲にして行われるものではなかったのです。それに妥協して行われるものではなかったのです。

ルターも同じでした。皆さん、自分がありとあらゆる社会的な関係から切り離されると分かっているながら、また、将来的にそこに死が宣告される可能性がある分かっているながら、自分の信じている事柄を貫き通すことは簡単なことだと思いますか？あらゆることを捨てて真理に立つということは容易なことだと思いますか？私たちに、ルターが議会に召喚される前夜、彼がどのようなことを祈ったのかは

分かりません。でも、何となくこの詩篇 119 篇のことばが聞こえてきそうです。「主よ、どうぞあなたの恵みを与えてください。あなたの助けを与えてください。そして、私があなただけのことばを語るようにしてください。」と。皆さん、祈っていますか？そのような決意をもっていますか？

## 2. 著者の決意 44-48 節

最初に言ったように、後半部分に彼の決意の宣言がなされています。八つある中の一つはすでに見ましたが、残りの七つはまるで機関銃のように矢継ぎ早にその決意が並べられています。著者が言わんとしていることはそれ程難しいことではありません。でも、信仰者がみな持っているはずの決意がここに書かれています。その前提にあるのは、神が彼の祈りに答えてくださるということです。約束している通りに、神は私たちに溢れんばかりの恵みを与えてくださるのです。イエス・キリストご自身を私たちのためにお与えになったこの方は、あらゆるものを私たちに溢れんばかりに与えてくださる方なのです。それは私たちにも同じように適用されています。だから、私たちが持つべき決意とは何なのか、皆さん、よく自分自身の胸に手を当てて、著者の言うことに耳を傾けてください。私たちも同じことばを言えるかをどうか良く考えてください。

### 1) 専心＝献身の決意 44 節

この事柄だけに私は進んで行くと言うのです。「私は守ります」という決意です。44 節「こうして私は、あなたのみおしえをいつも、とこしえまでも、守りましょう。」、神の律法を私は守るといふ、その専心の宣言です。もうすでに、著者はこの 119 篇の中で何度もこの同じ宣言をしました。8 節、22 節、33 節、34 節に同じような内容のことばが出て来ました。「私は守ります」と言います。また、この後も、繰り返してくださるように、これと同じような宣言が出て来ます。でも、この箇所だけが特別なのです。「あなたのみおしえをいつも、とこしえまでも、守りましょう。」とあります。今、この地上にあって私たちは不完全だけれど、でも、いつもこのことを心がけて私は守って行くのです。そして、いつの日か私が完全にされた時に、私は永遠にあなたのみおしえを守って生きていくことができる。だから、絶対にこの決意を変わることなく「いつも、とこしえまでも、」守りますと言うのです。

皆さん、彼が置かれた状況を思い出してください。彼はみことばに対する献身のゆえに迫害されたのです。神の前に律法を守って生きていこうとする、その生き方が献身の根源だったのです。私たちだったら妥協していると思いませんか？そんなに辛い人生なら…と迷いが生まれませんか？でも、彼は言います。「なぜなら、神さまが助けてくださるから。溢れんばかりの恵みが与えられ、そこには必ず助けがあるから、私はあなたの前にみことばを守って生きていきます。」と。

ローソン先生はこのように言います。「様々な困難、危険、迫害というのは、実際に、私たちの主に対する献身を深める。また、みことばに対する信頼を深めていく。まるで、強い風にさらされている木々が、その風によって吹き飛ばされないように、その根を地中にしっかりと張り巡らせようとするように、人生における様々な信仰のチャレンジに出会う信仰者たちは、自分たちの根をしっかりとみことばという土台の上につなげておこうと、その根を張り巡らそうとするのです。」と。

「私は守ります」、これが彼の 2 番目の決意です。これこそが真の信仰者の姿です。「困難があるからみことばから離れます」ではありません。「困難だからみことばにしがみつきます」です。

### 2) ストレスのない人生の決意 45 節

「私は歩きます」、これが彼の宣言です。45 節「そうして私は広やかに歩いて行くでしょう。それは私が、あなたの戒めを求めているからです。」、「歩く」とは「人生の生き方」のこと、その道筋です。どのような道なのか？どのように歩いて行くのか？それは「広やかに」ということばで訳されています。「広やかに歩いて行く」、少し理解しにくいかもしれませんが、明らかに、比喩的表現が使われています。これは「解放された生涯、束縛されていない人生」です。何による束縛なのでしょう？ある注解者はこのように言います。「それは心の内側にある自由が外側にはっきりと現われているような生き方だ。」と。また、別の先生は「このことばをもって現わされていることは、ありとあらゆるストレスやプレッシャー、また、不安からの解放の人生だ。」と言います。「広やかに歩く」、何の不安もなく、何の心配もせず、ストレスにさいなまされることもなく、プレッシャーに押しつぶされそうになることもなく歩いて行く人生は自由だと思いませんか？そのように歩くと言うのです。

なぜ、彼はこのような宣言をするのでしょうか？彼は「あなたの戒めを求めているからです。」と言います。皆さんも覚えておられるでしょう？マタイ 6 : 31-34 にあるイエスのことば「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。:32 こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要なことを知っておられます。:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。:34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。

労苦はその日その日に、十分あります。」、著者は同じことを言っていないですか？「私はあなたの戒めを求めているから、一切のことを心配する必要がない生き方をすることができます。そのように生きていきます。」と。

この詩篇の著者は、地上の事柄に思い捉われることがないと言うのです。確かに、彼の人生は非常に大変でした。少し歩けば敵にぶつかるのです。いろんな所でいろいろなことを言われていることを知っているのです。いろいろな計画が立てられていることも耳にしています。いつ、今の自分の地位から蹴落とされるのかも分かりません。でも、彼は言います。「別にいいですよ。私にとって大切なことは、あなたの戒めを求めることだから。」と。私たちの人生の中で多くの者が私たちを縛り付けます。でも、私たちも同じように言えるのです。「私はストレスのない不安から解放された人生を歩んでいきます。」と。なぜですか？神のみことばの通りに私たちが生きていくなら、主はそれらの心配を私たちの代わりにしてくれている方だからです。必要を備えてくださり、解決をもたらしてくださり、私たちの最善を為してくださる方だからです。彼にとって最も重要だったのは、この世の様々な事柄ではなく、神に喜ばれるか、あるいは、喜ばれないかということだったのです。

### 3) 布告、宣告する決意 46節

「私は語ります」という決意です。46節「私はまた、あなたのさとしを王たちの前で述べ、」、「神のみことばを宣べ伝えます」と、これは42節に書かれていることの繰り返しと言っても良いかもしれませんが、この詩篇の著者がいったいだれなのかを正確に知ることはできませんが、だれであったにしろ、この箇所からはっきり分かることは、彼は王の前に出ることが出来る人物でした。彼の敵は君主たちだったと記されています。つまり、彼はこの人間的な基準で見ると、非常に地位の高かった、失うものの多かった人物です。けれども、彼はそのような権威や自分が持っている権限も、成功に満ちた人生も、人からの尊敬も失うことができないものとは考えなかったのです。彼は正しいことを告げたかったのです。神のみことばを宣べたかったのです。神の仰せを、神の証をしたかったのです。たとえ、それによって彼が今まで努力して得てきたものすべてを失うことになったとしても、神によって与えられる恵みのゆえに、強められて「私はします」と宣言するのです。

モーセを思い出しませんか？ヘブル人への手紙11章に記されています。11：26「彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。」と、キリストのゆえに恥を受けることを選択しました。この著者も同じように、神の証を立てることに決心をしていたのです。

### 4) 恥じることのない決意 46節

次に、同じ46節にこのように記されています。「しかも私は恥を見ることはないでしょう。」と、少し分かり難いのですが、原文を忠実に理解するなら「私は恥じません。」となります。44節から出て来る4番目の決意の宣言は「恥じることのない」という宣言です。「私は恥じません。」と。こう言うと、すぐにみことばが思い浮かびます。ローマ1：16「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」著者は、神のみことばを恥とはしなかったのです。なぜなら、これが彼を救ったみことばだからです。このみことばは彼を慰めるみことばだからです。このみことばは彼を励まし、彼を強めるみことばだったからです。このみことばは彼の生涯にあって、足のともしびであり道の光なのです。

皆さんにとっても同じではありませんか？このみことばは皆さんを救うみことばではありませんか？皆さんを慰め、励まし強め、皆さんに進むべき道を明確に示してくれるみことばではありませんか？それならなぜ、私たちはみことばを恥とするのでしょうか？なぜ、私たちはみことばを大胆に宣べ伝えることができないと思うのでしょうか？なぜ、人々の前に神の真理を証することに恥を感じるのでしょうか？著者は、世の中の人たちが彼をどう思うのかとそのことを考えたわけではありません。彼は主が彼のことをどう思うかを考えたのです。

自分の主人である神が、自分をどう見るのかです。彼はこの世を味方につけて主に敵対するよりも、主に味方になっていただいて、この世と敵対することの方がすばらしいと分かっていたのです。皆さんはどうですか？だから、彼は言うのです。「私はあなたのみことばを恥としません。」と。

### 5) 継続する喜びの決意 47節

「私は喜びます」と彼はそう宣言します。47節「私は、あなたの仰せを喜びとします。それは私の愛するものです。」、「私の愛するあなたの仰せを喜びとします。」と言います。47節と48節に出て来る残りの三つの決意は、心の内側の態度のことを言っていると思います。なぜ、このような決意が生まれて来るのか、なぜ、このような献身に満ちた生き方をして行くことができるのか、実は、それがここに現われているように思います。なぜなら、彼が分かっていたことは、神のみことばに従っていく人生こ

そが喜びの人生であるということです。詩篇 1 : 2 で「まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。」と言うように、また、119 : 14 に「私は、あなたのさとしの道を、どんな宝よりも、楽しんでます。」と記しているように、この著者にとって、神のみことばこそが彼の喜びだったのです。そこにしか喜びを見出すことがなかったのです。

しかも、「私は、あなたの仰せを喜びとします。」と書いています。この「仰せ」ということばは「戒め、命令」と訳すことができます。私たちは「神さま、あなたの慰めのことばを喜びとします。」と言うかもしれません。また、励ましのことばに喜びを見出すかもしれませんが、彼は「あなたの命令を喜びとします。」と言います。なぜでしょう？神を愛している者にとって、神の命令は喜び以外の何ものでもないからです。嫌々しているのではないのです。無理矢理させられているのではないのです。「証しなさい」と言われるから、神が後ろで刀を持って立っているから強制的にしなければいけないと思っているのではないのです。「私はあなたを愛して止まないから、それが喜びだから、人々の前で伝えたくてしょうがないのです。」と思ったのです。

ヨハネは言いました。I ヨハネ 5 : 3 「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」と。イエスはこのように言われました。ヨハネ 14 : 15 「もしあなたがたがわたしを愛するのなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」、14 : 21 「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。」、14 : 23 「イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」14 : 24 「わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。」。

彼は神を愛していたのです。それゆえに、神の命令を守りたいと願い、その命令を守ることは他の何ものでもない、喜びでしかなかったのです。

#### 6) 継続してあなたを慕い求め続ける決意 48 節

48 節「私は私の愛するあなたの仰せに手を差し伸べ、」、ここで言っているのは、彼が心から慕い求めること、手をあげて「どうぞ、私に教えてください。私にもっと分らせてください。」と願い求める姿です。詩篇 42 : 1 に「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」と記されている通り、それが彼の言っていることです。彼の心の内側には、神の仰せ、神の命令をもっと知りたい、もっとよく理解してそれを守っていきたいという願いがあるのです。その願いを私は持ち続けている、あなたが望むような者になりたいからと、それが彼の決意です。それが真の信仰者の変ることのない願いなのです。

#### 7) 深い思い巡らしの決意 48 節

48 b 節「あなたのおきてに思いを潜めましょう。」と、これは深い思い巡らしの決意です。神のみことばを、その特徴を、神の行動をしっかりと思い浮かべて、思い巡らして、私はいつもこのみことばから離れることなく歩んで行きますという決意です。

皆さん、どれ位神のことを考えていますか？毎日の生活の中で、一週間の中で？もしかすると、この中に「私は日曜日の朝の 1 時間半だけ神のことを考えます。」と言う方、「毎日、デポーションの時間の 10 分間だけ神のことを考えます。」と言う方がおられるかもしれません。でも、この著者が言うことは「私は、24 時間、週 7 日、一年 365 日、ずっと神のみことばを思い巡らしている。」です。神の真理に思いを留めている、なぜなら、このみことばを愛しているから、このみことばが助けを与えてくれることを知っているから、このみことばは神のことばだからです。このような決意が生まれるのは、彼が苦しみの中にいたからかもしれません。なぜなら、そこにしか安らぎが見えないからではありませんか？いや、実際に、そこにしか安らぎがないからです。どのような状況にあっても、神のみことばは私たちに慰め、私たちに助け、私たちに励ましてくれます。

著者は私たちに、彼自身の告白をもって、祈りをもって、彼自身の決意を表わすことによって、真の信仰者とはどのような者かを示してくれています。私たちはいろいろな人生の事柄を恐れています。私の健康、私の財産、社会的地位や人間関係、私たちの教育、人からの尊敬と、上げればきりがありません。けれども、それらすべてを量りの一方に乗せて、もう一方に、神と神のみことばを乗せるなら、どちらが傾くべきだと思いますか？人生の様々な事柄の方が大切でしょうか？それとも、神のことばの方でしょうか？どうぞ、皆さん、ご自分で考えてください。

この詩篇の著者は言いました。「私にとって大切なのは神と神のみことばだ。」と。著者はこのような決意をして、このような生き方をすることによって、すべてを失ったかもしれません。けれども、間違いなく、彼は神からの喜びと賞賛を受けていることでしょう。皆さんもそれを欲しくありませんか？

これはこの著者だけがこのように生きているわけではありません。人間の歴史の中で、信仰者たちが生きて来た生き方です。

1553年、イギリスで最初の女王が生まれました。血まみれのメアリー、聞いたことがありますか？「ブラッディーマリー」と言われています。彼女が王位に就いた時に、イギリスはその前の王によってローマカトリック教会から離れていました。宗教改革が起こったのです。ところが、彼女が即位したその瞬間から、彼女はプロテスタント教会を迫害しました。彼女は300人を超える女性や子どもたちも含むプロテスタント教徒たちを、縛り付けて火あぶりにして処刑したことで知られています。彼らはみな殺されたのです。彼らがみことばに忠実であろうとしたからです。その中で最も有名な人物の一人であるヒュー・ラティマーは非常に大胆な人物で、ときの王ヘンリー8世のもとに、新年のお祝いとして一冊の新約聖書をナプキンに包んで手渡しました。ヘンリー王は妻と妾をたくさん抱えているような非常に不道德な人物でした。その聖書を包んでいたナプキンには一言のことばが添えられていました。「不貞を働く者には神のさばきがある。」と。彼は1555年10月16日に、オックスフォードで磔にされて、火あぶりに遭います。非常に珍しかったのですが、その時に、二人の人物が同じ杭に縛られていました。彼と同じように信仰を守った非常に著名な働き人だった、ニコラス・リドレイという人物です。ラティマーが有名なのは、このリドレイに向かって、火あぶりにされる直前に語った彼のことばのゆえです。彼はこのように言いました。「リドレイ先生、安心しましょう。そして、男らしく振る舞いましょう。私たちは今日この日、このイギリスにおいて、神の恵みによって決して消え去ることのない灯火をともしることになるから。」と、そう言って二人は勇気づけられ、火に包まれて死んでいったのです。伝説によると、ラティマーは燃えさかる炎が彼の体に迫って来るのを、まるで喜んで受け入れるかのように苦しむことなく焼かれていったと言います。

皆さんはこのような迫害を受けることはないかもしれませんが、でも、皆さん、考えてください。皆さんがもし、16世紀に生きていたら、皆さんはその信仰のゆえに火あぶりにされましたか？もし、皆さんが16世紀のイギリスにいたら、人々は皆さんを捕らえて、その信仰ゆえに、みことばに対する献身のゆえに、皆さんを迫害したでしょうか？もし、その答えが定かでないなら、もう一度、自分自身の信仰を吟味してください。なぜなら、真の信仰者はみことばから離れないからです。真の信仰者は、その信仰に妥協を抱かないからです。弱いときがあります。不安になることがあります。恐れを抱くこともあります。でも皆さん、覚えていますか？最初に何と祈りましたか？「主よ。あなたの恵みを私に与えてください。あなたの約束のとおり。」です。約束を守られる真実な神は、皆さんの必要なときに、溢れんばかりの恵みを備えてくださって、どのような状況の中でも、皆さんが耐え抜き、皆さんが勇気をもって、大胆に主の証をすることができるようにしてくださる方です。

そのような生き方をして行きましょう！！